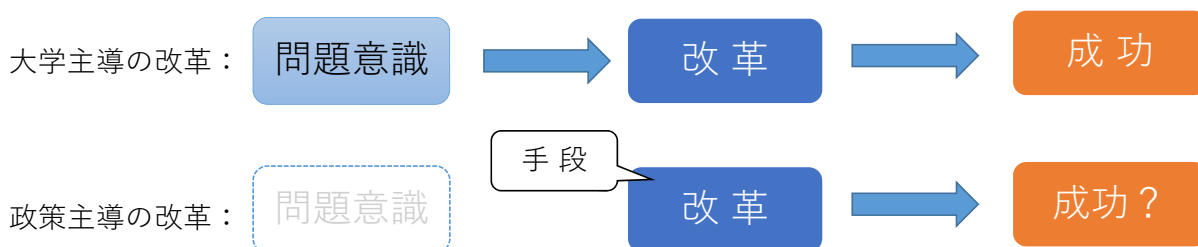


入学者選抜の効果検証の在り方を考える

西郡 大（佐賀大学）

1

近年の大学入試改革について



大学

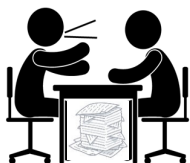
これまでの入試で「学力の3要素」を評価できていなかったから、改革しなければならないのである

大学の主体的な問題意識が起点ではない。
この中で、各大学は改革に取り組んでいる状況

2

こうした状況の中で

改革に向けて激論、
学内・学外の調整



新しい改革案を発表
そして、学生募集



新しい制度で
試験を実施



合格発表
無事に入試終了



一安心



どんな成果？
効果はあった？



改革・改善の理由は何であれ、
必ず**効果検証**が求められる。

3

問題意識

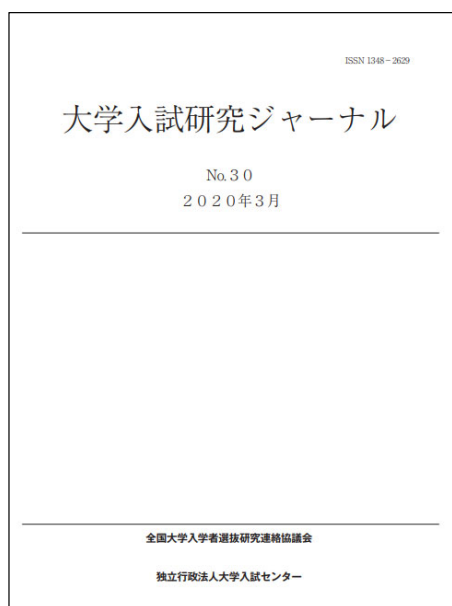
近年の入試研究（個別選抜）において、
効果検証の在り方について議論した研究を知らない。

入試研究として、あるべき効果検証の考え方について
議論することは必要なのではないか。

であれば、考えてみようというのが本日の主旨。

4

どんな効果検証がこれまでであったのかを整理



この **10年間** を振り返る

2010年 (No.20) ~ 2019年 (No.29)

- **個別選抜**の効果検証と考えられるもの。
- 各大学の入試制度や評価方法等に関して、何かしらの効果や課題を明らかにすることを目的としたもの。
- ただし、各大学の個別選抜の在り方に直接的に関係ないものや入試制度の構築段階にある報告は対象外。

選定の結果、 **50件** の報告に注目

- 追跡調査に関する検証
- 評価手法の精度に関する検証
- 選抜機能に関する検証

3観点で整理

5

追跡調査による検証

■ 大学入学後のパフォーマンスを入試区分で比較

任意の入試制度を他の入試区分と比較することを通じて、当該入試の適正性を検証したもの

【指標例】 GPA、学籍状況、初年次教育の成績、卒業後進路状況、医学部共用試験のスコアなど

■ 学業成績以外の評価指標を取り入れた分析

分析の視点は上記と同じであるが評価指標が学業成績以外のもの。

【指標例】 指導教員による評価、学生表彰の割合、入学後の科目履修行動、学生のピアレビュー、外部のアセスメントテスト、エンロールマネジメント的分析など

■ 長期的な視点に立った検証

10年間を一区切りとして、長期的視点にたった検証を行ったもの。

6

評価手法の精度に関する検証

- 面接の信頼性について一般化可能性理論を用いた検証
- 書類審査と面接試験における評価者の寛大化傾向について項目反応理論からの検証
- 独自に開発した問題解決能力試験について、センター試験との相関や合格者の特徴、学業成績との関係性などを分析することで評価方法の妥当性を検証
- 個別学力検査の質を検証するために、合格者を対象に質問紙調査を実施し、入試問題の内容的妥当性を検証

7

選抜機能に関する検証

- 入試制度の変更によって受験者や合格者の学力水準がどのように推移しているかについてセンター試験の得点を用いた検証
- 志願者や合格者の学力水準に志願倍率が及ぼす影響力についてセンター試験得点を分析
- 医学部の地域枠の導入によって、地域枠入学者と一般枠入学者の入試成績や入学後の成績を比較し、地域枠入学者の学力水準が担保されているかを検証
- 学力水準とは違った側面に注目し、入試科目と志願倍率が入学者のコンピテンシーとリテラシーに影響を与えるのかについて分析
- 新設学部の入試制度について初年度の実施結果に注目し、志願者の学力水準や英語外部検定試験の活用の影響、合否入れ替わり率など、導入直後の成果や課題について検証
- 一般入試の20年間にわたる合否入替わり率の安定性検証、ある学科の25年間にわたる入試動向を追跡し、長期的な視点から見える入試制度変更の成果や課題を総括的に分析

8

これまでの効果検証事例をみて思う雑感

- 多くの追跡調査は、既存の指標や経験的な観点からみて入試制度や評価方法等の妥当性や適切性についてアプローチ。
- 教育改善の文脈よりも入試をどうするべきかという観点が中心。
⇒ 入試に関する担当者が検証を担うので当然と言えば当然。
- 新しい制度や手法を導入すると、その効果を示すための検証作業になりがち。

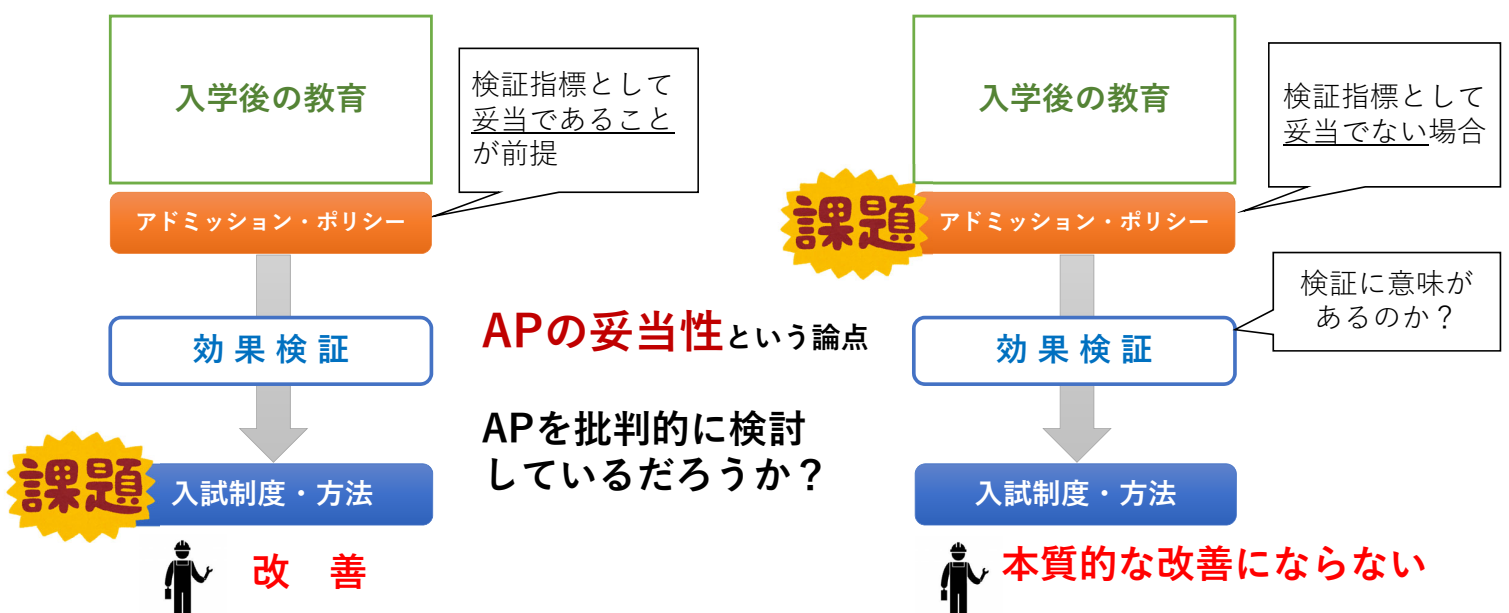
(発表者の経験から)

追跡調査を含む様々な検証を通して入試の改善を検討してきたが、教育全体の質的な向上という点からみれば、改善の効果は限定的であると感じてきた。

⇒ そもそも何のための検証かという原点に立ち返れば、DPで示す「学生の育成」という本質的な目的に行き着くはず・・・

9

もう少し踏み込んでイメージするとこんな感じ



10

「APの妥当性」をどのように議論する？

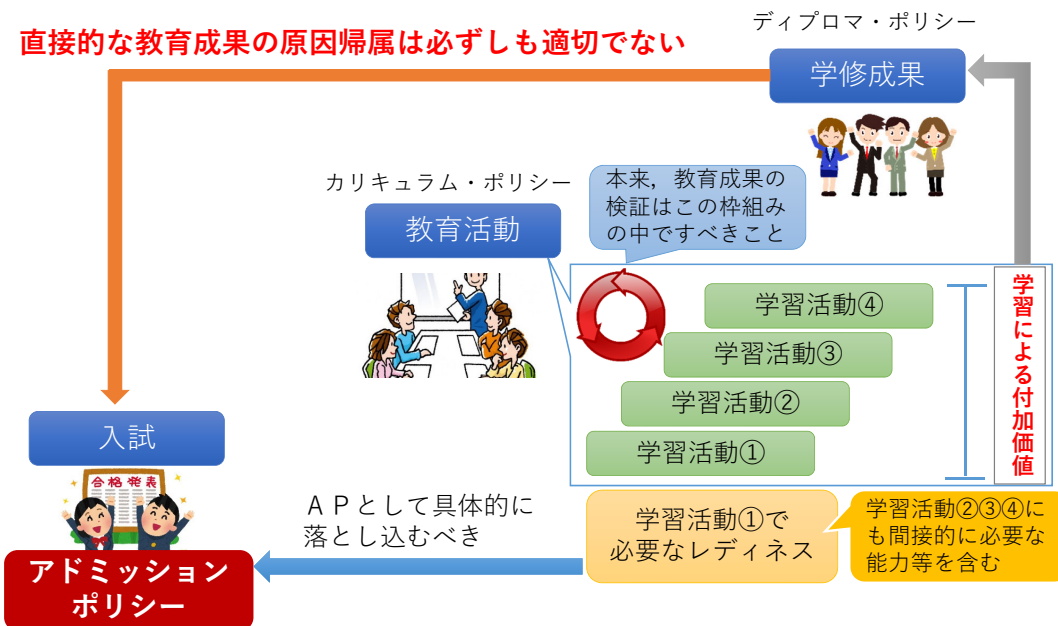
- アドミッション部門単独で検討することは困難。
- 守備範囲外として考えるか？
- もしAPが妥当でない場合、不毛な検証作業は避けたい。
- そう考えると、教育の内部質保証体制での検討が必要？
- どのようなイメージが考えられるか？→そう言えば・・・

「大学入試学」における
一歩踏み込んだ専門性の可能性

教学マネジメント指針

令和2年1月22日
中央教育審議会大学分科会

追跡調査による効果検証で考えておきたいこと

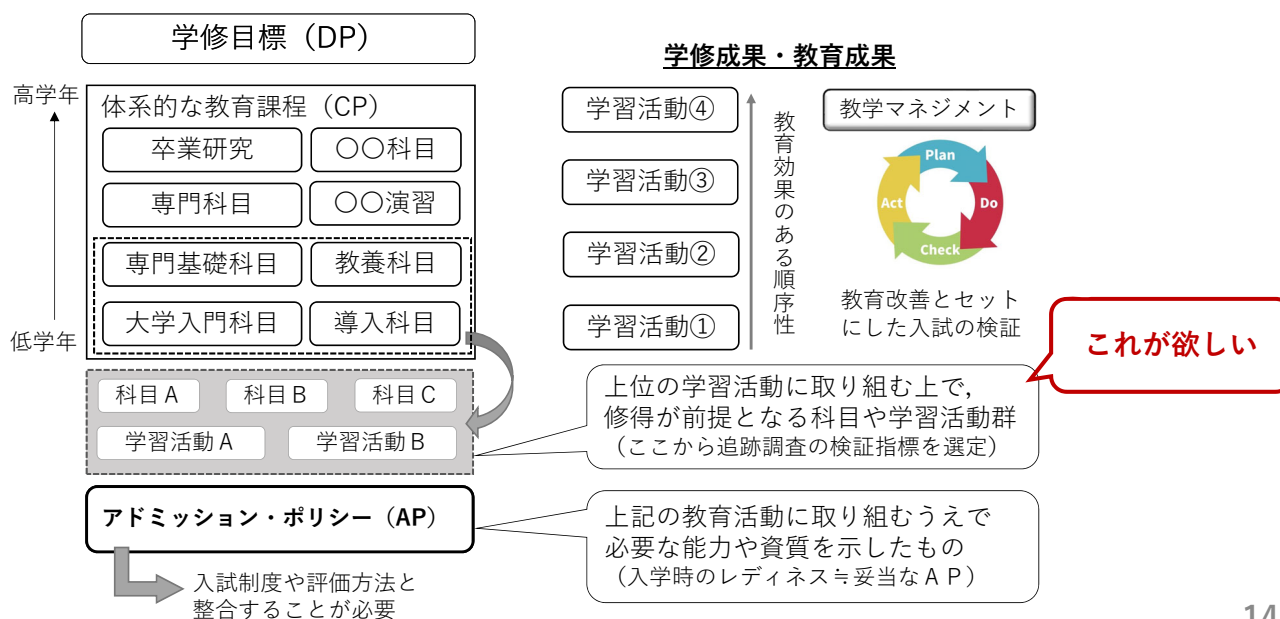


教学マネジメントにおいて期待されているか（一部抜粋）

- 『カリキュラムマップ』の作成等を通じて、『卒業認定・学位授与の方針』に設定された各観点を満たす上で必要な授業科目が過不足なく設定されているかを検証し、授業科目の設定や内容の検討に活用するとともに、必修科目とそれ以外の授業科目を分類すること。
- 『カリキュラムツリー』の作成等を通じて、各授業科目相互の関係や、学位取得に至るまでの履修順序や履修要件を検証すること。
- 自学学生や単位互換を行う他大学等、学内外に対し自学の学位プログラムにおける個々の授業科目の教育課程上の水準と学位プログラム全体の体系性を明らかにする観点から『ナンバリング』を実施すること。
- 『カリキュラムマップ』や『カリキュラムツリー』『ナンバリング』等を学内の教職員間におけるコミュニケーションツールとしても活用することで、教職員の教育課程の編成に関する理解が深まるとともに、前例踏襲を超えて教育課程全体の授業科目数等も含めた構造的な問題点が可視化される効果も期待される。

13

「妥当な A P」を議論するための考え方



14

まとめと課題

【まとめ】

- **学位プログラムの中で教育と入試を実質的かつ機能的にリンクさせたい**
 - 大学の 대중化が進む中で、多様な学位プログラムが構築される現実がある。
 - 選抜機能が低下し、学生の基礎学力や特性が多様化している現状がある。
- **あくまで本提案は1つのかたちであり、発展的、批判的に検討されることを期待**
 - 効果検証は多様であるべき。ただし、効果検証の在り方を議論するための問題提起は必要。
 - 入試の効果検証論は、「大学入試学」の専門性の1つとしてあっても良いのではないか。

【課題】

- **現実的には、議論するための組織整備、体制、環境などの基盤構築が不可欠**
 - 言うほど簡単ではないのは明らか。
 - DPやCPに関わる実質的な内部質保証体制との連携が不可欠。